

# 将軍学

其の 11

1 現実に起きるかどうかわからないのに、悪い場面ばかりを想像して心配しては何  
もできない。人生に失意の体験はつきものであり、その体験を次に生かすことが成功  
への鍵である。だから、まず行動しよう。「いつかやろう」と先へ延ばす限り「いつか」  
は永遠に訪れない。

2 人間は「親と子」、「教師と生徒」といったタテの関係、友人同士のようなヨコの関係  
以外に異世代間の「ナナメの関係」が大切である。

3 「人間の人生は、この『ナナメの関係』がどれほど豊かであるかによって、かなりの部  
分が決まる」。こうした、多彩なつながりで満ちている組織が大事である。

4 何度も何度も失敗して、うんと苦勞して経験を積むのだ。それが全部、成長の滋養に  
なり、また生涯の財産になっていく。「当たって砕ける」という思いで行動していくの  
だ。その覚悟がなければ本物のリーダーにはなれない。

5 一度の出会い、一回の語らいが、人を変えることがある。時間の長短ではない。大事なのは、その一回に臨む姿勢だ。

6 真剣勝負で植えた友情の種は、必ずや見事な信頼の花を咲かせるものだ。「誠実第一」で、きょうも新たな友情を結びたい。

7 話し合うことは、人生のほかの行為よりも楽しいものだ。対話は自説に固執した自己主義のぶつけ合いではない。単なる言葉の往復でもない。対話を通じて互いの語る言葉の「意味」を共有し理解し合うことである。

8 そして新たな価値を創造しゆく作業なのだ。対話がなくなれば澱む。活発な対話のあるところ、新しい命が流れ通うものだ。対話は人類を友とし、世界を味方にするものだ。

9 待っているだけでは対話は始まらない。歩み寄り、声をかけていくことだ。誠実に信念を語る。人間の声ほど美しい音律はない。

10 初志を貫徹することは難しい。壁にぶつかるとできない理由を並べたくなくなる。だがそ

れでは自身の負けである。

11 目標を成し遂げるには、何のためとの一点を心に赤々と燃やすことである。たった一人の挑戦も劇的な変化をもたらすことがある。「初志を貫き通すならば、一人の人間が状況を変えることができる」。

12 「無知」とは、もろもろの悪意・嫉妬・瞋恚の母であり他すべての悪の中で最も卑劣で醜い罪悪である。

13 「青春時代に生き方の骨格をつくり、さらに完成させていくところに確かな人生に道がある」。若い時に確固たる信念を持ち、貫くところに偉大な人生への道がある。可能性は無限だ。その扉を開くのは魂と魂の触発であることを忘れまい。

14 異論が出された時、どのような行動を取るかで結果は大きく異なってくる。いたずらに自説に固執することなく、互いに打ち合うことで自他共の進歩の道が開かれるのではないだろうか。

15 人生の学校に休日はない。努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る。

16 人から批判されることを恐れてはならない。それは成長の肥やしとなる。チャレンジして失敗することを恐れるよりも、何もしいことを恐れる。

17 自身の心が太陽と輝けば、いかなる闇も消え去る。わが友に、我が地域に、一日また一日と希望の光明を、より強め、より広げ行こう。

18 戦い切った人の心に悔恨の雲はない。困難の壁を破り、凱歌を響かせた笑顔は黄金に輝き、瞳には美しい青空が広がる。

19 一日の行動の積み重ねが一年の、十年の業績にそして一生の事業となる。ゆえに朝日とともに新鮮な空気を心に吹き込み、一日一日を悔いなく断固勝ち抜くことだ。

20 我らの進む「対話の道」には、納得があり、共感がある。慈悲があり、尊敬がある。誠実があり、忍耐がある。勇気があり、正義がある。そしてともに幸福と勝利へ向かう希望があり、向上がある。

21 常に「現在」から「未来」へ。そして「今日」から「明日」へ。これが人生の歩み方の真髄。  
我らの黄金時代は未来に、そして明日にこそある。

22 自分にしかできない使命がある。舞台がある。人生は台本のない劇。自分らしく、名  
優のごとく生き生きと、いつも笑顔で生き抜いていきたい。

23 目の前にいる「一人」、現実にかかわっている「一人」。いかにその「一人」を納得さ  
せ変革することができるかどうか。その行動が未来へ、世界へ、すべての人々へと波  
及していく。

24 春は美しい。伸びゆく青春の生命はさらに美しい。そこに限りない未来がある。目標  
に向かい努力していけば不可能なことなど一つもない。

25 未来といっても「今」から始まる。世界といっても「ここ」から広がる。「今」このと  
きにいかに手を打つか。「ここ」の地盤をいかに固めゆくか。「今日」を勝つことだ。「こ  
こ」で勝つことだ。

26 人生の喜びと満足は後ろにはない。前にしかない。だからこそ前へ前へ進め。これこそが真の人生の勝利。

27 生ある限り希望はある。雨や嵐の日でも、雲を突き抜ければ太陽はいつも輝く。太陽と希望は一体。だからこそ君よ、友に希望を贈りゆく太陽であれ。

28 苦難がないことが幸福なのではない。苦難に負けず、たとえ倒れても断じて立ち上がり、乗り越えていく。そこに人生の幸福があり、喜びがある。

29 幸福は他人が決めるのではない。誰かとの比較で決まるものでもない。自分の心ひとつで決まる。自分をつくることだ。わが心を磨くことだ。

30 戦う人生は美しい。「勝利者」を、「幸福者」を目指し、希望に燃え勇気を燃やしこの一生を戦おう。

31 「現在を勝つこと」が「未来を勝つこと」。今決意の戦いを起こせば、明日は希望と幸福の勝利となる。

32 新しい出会いを求め、新しい友人をつくらう。古い友人を大切に、さらなる友情を結ぼう。友が増えれば、世界が未来が広がる

33 過去がどうあろうと、今が大事なのだ。これからが一番大事なのだ。歴史とは、今のことなのだ。過去にこだわってはならない。今を外れた過去はないからである。

34 相手が苦難の時こそ、友情の手を差し伸べよ。励ましの声をかけるのだ。

35 責任感の強き人に知恵が湧く。無責任は敗北の因。

36 苦難ほど偉大な教師はない。怒濤の荒海を越えよ。不動の人格を築け。

37 政治の目的は、「個人の幸福」と「社会の繁栄」との一致にある。その理想を実現する為には、どんなに時間がかかろうとも、どんなに苦勞があろうとも、民衆の大地から民衆の手づくりの指導者を育て上げなければならない。

38 リーダーが安住しては、人の心を動かすことなどできない。まして油断は大敵で

ある。即座に報告を入れよ、即座に手を打つのだ。

39 今、この時にできることは何か。勝利のため、なすべきことは何か。頭を絞り、智慧を出し、声の限りを尽くして皆に勇気を贈ることである。

40 大事なものは、格好ではない。真剣であり、真心である。誠実であり、勇気である。情熱であり、確信である。歴史を変える戦いは、最も苦しい試練の時にこそ最後まで頑張り抜く「執念」で決まる。

41 どうか、一人として苦難に負けないでいただきたい。誰でも苦難はある。またどんなに幸せそうに見えても、苦勞のない人間などいない。

42 人生の勝負は、長い目で見なければ分からない。世間の移ろいゆくさまじきまな評価など、どれもはかないものである。一日一日、生まれ変わったように生きる。その人生に感傷もない。愚痴もない。堅実な一步一步が、必ず偉大な人生となっていく。

43 「兵の將たるは易く、將の將たるは難し」。力がなければ、厳しき現実を勝ち抜いてい

くことはできない。リーダーは、力をつけるのだ。社会のために尽くせば実力がつく。

44 大河と偉大な人間とは悠然として曲がった道をやく曲がりながら、然し決してその目標をあやまたぬ。(ニーチエ)

45 人はともすれば他者との交流を「畏れ」、自分から「心の壁をつくってしまふ場合が少なくない」。一切の壁を勇敢に取り払って対話を広げていくのだ。

46 何ものにも揺るがぬ友情と信頼を築こう。そのためにも、まず自分自身が周囲の人びとの友となり、友の支えとなって成長していくのだ。

47 人間は、人間を離れて人間になれない。人間の中でこそ、より大きな自分となり、より大きな喜びを得るのだ。

48 「人」ではない。「自分」が変わるのだ。「誰かがやるだろう」ではない。「自分がやるのだ」。どんな状況にあっても、頭を使い知恵を絞り、心を前に向けて、何かを為していくことだ。

49 「油断大敵」が將軍学の鉄則である。自分が責任を担い立って、血のにじむような苦勞を重ねてきた指導者は、この「油断大敵」という一点を心に刻んでいる。

50 戦いは真剣でなければ勝てない。死ぬか生きるか——それくらい覚悟がなければ、どんな戦いも戦えない。「不可能」としても「可能」に。その決心で戦い抜くことだ。

51 「希望」こそ「変革」するための原点なのだ。「男はなすべきことをなさねばならない」。「人は受けた恩義は決して忘れてはならない」。「戦うべき時は粘り強さがなくてはならない」。

52 これから大事なのは、幹部革命なのだ。墮落は目に見えない。「心」から始まる。やがて姿に現れる。一段と信頼される人になるのだ。そして世間からはめられる人間になるのだ。

53 「人物の偉大さは、その強さにある」。まず自分自身が強くなることだ。そして、ともに進む一人一人を強くしていくのだ。一歩でもよい。自分の労苦と努力で、道をつくっていくことだ。

54 平和市民の実践哲学

第一に「勇気」だ。新時代を開きゆく力は、「勇気」である。

第二に「智慧」だ。無限にひろがる新しい知識を獲得せよ。

第三に「勝利」だ。正義の使命の人生は、断じて勝たねばならない。勝てば、民衆を幸福にできる。

55 知識は、究極的には、智慧をわきたたせるための手段である。智慧が「幸福」を生む。

智慧こそ「人を救う力」であり、人が生きていくための根源の魂である。

56 自己を向上させる仕事に、もうこれでいいという完成はない。一瞬一瞬、絶え間のな

い新たな挑戦が必要なのだ。

57 忍耐こそ希望の母であり、執念こそ勝利の光である。大いなる苦悩なくしては、如何

なる完成せる才能もあり得ない。

58 長い人生だから、決して順風満帆な時だけではない。「もう駄目だ」と思うような、絶

体絶命の苦境に直面することもあるかもしれない。しかし人間は人間の中でしか自分

を磨くことはできない。人と交わり、人に学ぶ中でこそ、自分を鍛え、向上していきける。

59 大事なものは、へこたれないことだ、負けて意気消沈してしまつたら、それが本当の負けである。「負けるが勝ち」とは、「次がある」、「次は必ず勝つ」と勇気を奮い起こすことだ。

60 「自らの努力によって人間性自身を開拓してゆく可能性をもっているのが人間である」。時代の焦点は「人間性」の開拓であり拡大である。

61 「人間」、これこそ一切の原点である。人間を離れて社会はない。経済も政治も、宗教も思想も科学もない。否、すべての営みは「人間の幸福のために」存在する。

62 歴史は「変化」であり、「行動」であり、「変革」である。でき上がったものの上で、あぐらをかくのではない。自らの行動で変化を起こし、歴史を創るのだ。

63 人はその生涯に、さまざまな機縁に触れて多くの友をもつ。しかしなんといつてもその人における最も苦闘のときに、苦難をともにし、喜びを分かちあつた友への想いが、

生涯を通じてもつとも貴重なものとされるのではないだろうか。

64 友情を支えるものは、尊敬と信頼の念であり、どこまでも友を裏切らぬ誠実さである。そして一つの崇高な理想をめざして、ともに苦難を切り拓いていく勇氣である。

65 よき友をもつこと、よき先輩をもつこと。これは、人生の至上の幸福運であり、誇るべき宝であるといっても過言ではなからう。まして人間性が、さまざまに逆らいがたいたで惨めにも抜き取られつつある現代社会で、友情という人間関係は人間性を守る唯一の砦とすらなっていくようである。

66 友情は善悪ともに通ずることも知らなくてはならない。悪友は得やすく、善友は得がたい。ほんとうの善友とは、ときに自分の欠陥や誤りを厳しく指摘してくれる人である。偽り親しむのは、かえって身を滅ぼす悪友である。

67 真実の友情の経験をもたない人は、人間として不具となるといつてもけつて言いすぎではなからう。友情は愛することに存在するとはいえ、その根幹は信義である。信義は苦境にあつてこそ、その真価がためされる。

68

なんの苦勞もない白紙のような状態のなかに、けっして幸福があるのではない。せんずるところ厳しい現実のなかで、自分らしくせいっぱい努力し、生きぬいていく一瞬一瞬に生命の奥底から湧き出てくる歓喜、充実感こそ、幸福の本体なのではないかと考える。

69

幸福の本体は、結局自分自身のなかにある。この自分自身という問題と、物質的、環境的要素との関係を思い違っているところに、不幸を繰り返していく根本的な原因があると考えられる。

70

幸福が自分自身の中にあるということは、現在の自己のなかにあるということだ。それは、けっして幻想の未来にあるのではない。

71

現実の生活は、苦惱や悲しみに満ちているかもしれない。そのなかにあつて自分らしくせいっぱい努力し、そこに自己の生命を燃焼させていく。その人生のなかに実は無上の幸福があることを知っていただきたい。

72

崩れることのない、ほんとうの幸福の条件は何か。その第一にあげられることは、あ

くまでも主体的に積極的に、人生の問題にとりくんでいく生命の姿勢である。客観的状況だけに支配され、受動的に運命を考えるのではなく、どこまでも主体的に、自分の力をそうした状況や運命にぶつけて、少しでも切り開いていこうとする意欲である。

73 不幸を知らないで、幸福がわかるはずもないのである。人生のさまざまな労苦というのは、すべて幸福へのためにある。労苦が多ければ多いほど、やってくる幸福感も大きいにちがいない。

74 ほんとうの教養とは、その人が力いっぱい生きてきたその結果として、自然とその生命のうちから滲み出てくるものであろう。

75 教養というものを考えていくと、結局、それは円満な人格といったものになるように思われてくる。あらゆる角度から、なにか周囲に訴えかける清々しいものをもつていくこと。そして、それが人間関係を円滑に進めていく上で有効に働いていくこと。これが、教養という全体像ではないかと考える。

76 趣味というものは、いわば人間生活の潤滑油である。趣味のない人には潤いも人間的

な幅も、心の豊かさも感じられない。

77 趣味は豊かな心の泉である。その泉の中より自然に湧きいずるものが尊いのである。

また趣味は、人間性の美しい色彩でもある。平凡のなかにキラリと輝く人間性、ここに真実の美しさ、気品があり、趣味の真髄がある。

78 社会の場での戦いは、信用の積み重ねが大事である。それには誠実、誠意、真心以外

にない。あるところまで信用を積み重ねても、ひとたびそれに背くようなことがあれば、とたんにゼロになってしまっただけではない。次にそれを再建し回復しようとしても、世間は信じなくなってしまう。社会という場での戦いは、それだけ厳しいということを知らなくてはならない。

79 事業には、すばやい決断と磨かれた英知と、宝石のように堅い信用が大事だ。しかも、

熱意なくして成し遂げられた偉業は、いまだかつて一つもない。

80 人材として成長するためには、まずおのおのが職場で第一人者になることである。どん

な職場を見ても、人一倍戦った人、苦勞した人が勝っている。それは目に見えないが、

ぜんぶ真実の隣人が知っているし、また自分自身の一念がよく知っている。

81

男の一生は、どういう仕事をしたか、そして、また自分の選んだ仕事のうえでどれだけの功績を残したかによって決まると思う。要は、自分のありつただけの力を仕事にぶつけたか。そして、生命を完全に燃焼させてその時代、その社会にいかなる利益をもたらしたか。

82

仕事に不満をもつ人は敗北者である。それは環境に支配されきっているからである。どんな環境でも、そこを楽しい世界にかえていく人こそ、人生の勝者といえるのである。

83

職場においては、一つ一つが真剣勝負であり、動機よりも結果が問題にされる。社会が競争の世界である以上、そこで働くものは男女問わずこの原理のなかに生きなければならぬ。自己の人間性を磨くうえで、非情なようだがこれほど絶好の場は他にない。

84

職場における女性のあり方について、一言。仕事に責任感をもち、打ちこむことは当

然大事であるが、だからといって女らしさを捨ててはならない。女らしさを失った女性には、幾ら仕事のうえでは有能であっても結局周囲からけむたがられ、嘲笑されてしまう。総合的には大きなマイナスをつくっていることに気づくべきである。

85 シンは強くとも、表面はつねに優雅な気品とあたたかさをたたえて、職場に春風を吹かせていくような存在であつてほしいものである。傲慢にわがままを通そうとしたり、ヒステリックになったりしては、自分で自分を傷つけているのと同じである。気品のある、女性らしい女性は、幾つになつてもみんなから慕われ、大事にされていくものである。

86 仕事の鬼になつても、仕事の奴隷になるな。

87 人を使う場合には、一年間みなければ、なかなか信頼できない。三年間使つてみて、間違いを起こさず、会社のためにほんとうに働いてくれたという人ならば、信用できると考えてまず間違いはない。

88 いかなる事業でも、人生でも家庭でも、その他どのような場合でも、最後はかならず

勝つという決意。根性が成長を意味し、勝負を決する。

89 一冊の本のなかに一つの世界があり、いろいろな人生がある。人間一人が実際に自分で体験できる人生は一つしかないが、読書はあらゆる人生体験を教えてくれるのである。人は一冊の本を読むごとに、人生をより豊かにしていくことができるのである。

90 すぐれた書物がわれわれに与えてくれるものは、たんなる知識でもなければ、刹那的に消えゆく刺激でもない。生きることへの自信と、人間としての英知と勇氣。そして、生命の尊嚴への深い畏敬の念をよびさましてくれるのである。外から安易にあたえるのではない。内にあるものを湧き出させるものであろうか。

91 本を読むには、その読み方が三通りある。一つは、ただストーリーだけを追って読む。二つは、時代的背景、社会的情勢を考えながら読む。三つには、作者の思想、意図など。作者自身の人間を洞察して読むなかでもとくに大事なものは三番目で、そうでないと作品を十分に理解することはできない。

92 家に本なきは、人に魂なきがごとし。

93 信仰というのは、何が待ちうけているかもしれない人生にあつて、何があるうと何が起ころうと絶対に自分は大丈夫だ、といえるだけの揺るぎない自己を確立する、勇気ある自立の行為だと思う。

94 信仰の人とは、真理を謙虚に求めていく人であり、人間と尊き、生命の尊厳を真実に知る人である。信仰は宇宙と生命への確たる信念であり、英知の源泉として人間精神の骨格をなすものである。崇高な信仰をもつ人だけが、人間性の本源に立脚しつつ、生命のたくましい躍動をもつて正しく力強く生きることができるのである。

95 真実の宗教は、生活それ自体のなかに生き、あらゆる社会に根ざして、価値創造せしむるものでなくてはならない。けつして宗教のための宗教であつてはならない。個人の幸福と社会の繁栄の原動力なのである。

96 家庭は平和の縮図である。また、家庭のなかには社会の動乱も不安定もそのまま土足で踏み入ってくる。つまり家庭は社会を映す鏡であらう。

97 家庭が平和で幸福であるならば、社会に対しても自然と協調的になる。ところが不幸

です。さんだ家庭というものは、どうしても社会を白眼視し、反抗的であり、投げやりで無責任になりやすい。社会といったところで、各家庭の集団である。平和な家庭なくしては、平和な社会があるはずはない。

98 教育の効果は、20年、30年後に現れるといえよう。教育こそ次代の民族の消長を決定する。まことに重大な問題である。

99 教育とは、教室で習ったすべてを忘れ去ったあとにも、なおかつ心に残るようなものであろう。

100 政治の貧困を口にするのはやさしい。しかし、政治に貧困をもたらしただものは何かを考へなければならぬだろう。それはたんなる政策の貧困でもなければ、人物の貧困でもない。問題は、今日の政治学の抱く政治理念の貧困にあるのではないか。貧しい理念がいつまでも貧しい政治しか生み出しえないのではないだろうか。

101 民主主義のもつ大きな欠陥の一つは、大衆に迎合して人気をとることの上手な人物が、それだけで権力の座にのし上がる危険性があることである。その反対に賢明な指導者

であつても、宣伝が下手であれば無視されやすい。これが極端な形をとると、民主主義を破壊して独裁権力を狙うような人間を民主的な方法で選んでしまい、すべてをこの人物に委ねてしまうことになる。

### 指導者

第一に、包容力とは、さまざまな個性をもつ人びとを大きく包容する人間としての幅と深さである。

第二に、公平さとは、自己の感情や情実で動かされないこと、厳正公正に人を評価し用いていく一つの能力といえる。

第三に、確信。中心者のその組織体の目的に対する確固たる信念と、その目的観にたった個人の問題についての明確な判断。

第四、責任については、一つの組織の長であるということは、その組織の最高責任者ということ。現実の行動のなかで、たしかに責任をもつてこうしたいという、現実態示されるものでなければなるまい。

第五、先見性とは、正しく次代、歴史をみる目があるかどうかということである。組織をあくまで、目標をめざして指揮をとる者にとつて、絶対不可欠の要素である。現状に対する正確な認識と、そこを基点とした未来への深い洞察があるかないかが、組

織の盛衰を決するからである。

103

指導者は、名聞名利にとらわれたり、榮譽榮達主義であつては断じてならない。指導者の第一の資格は、民衆に幸福を与えきつていくものでなければならない。指導者は、つねに民衆の味方でなければならない。

# 将軍学

その12

1 経営におけるリーダーシップはすべて二つのことで成り立っている。一つは正しい方向を指し示すこと。もう一つは、やることとやらないことを明確にすること。「選択と集中」である。

2 働きやすさ

① 仕事の内容 ② 職場の状況 ③ 職場や仕事の「働き勝手」のよさ。  
欠点は働きやすさという次元。組織にいることへの受け身の幸せ感につながりやすい。

3 働きがい

達成感と成長可能性。達成感とは今の仕事に基づく働きがいである。  
働きがいは与えられるものではない。「やる気よりやれる気」。

4 人の一生は、さまざまな人との出会いで彩られる。数かずの出会いが人生の糸となり、数かずの糸は、その人の人生模様を色彩豊かに織り上げていくものである。

5 文化交流とは、政治や経済の表むきの化粧を落として、互いの素顔を内面の世界にあるがままに示しあい、真の理解と認識を生んでいくことである。

6 外交というのは、誠心誠意の人間の心の見せ合いだと思う。すべてをオープンにして話し合うことから「人間」の外交は始まるのである。

7 日本の行き方としては、さまざまな技術を開発途上国へ輸出することによって、世界に貢献すべきであると考え。さいわい日本は人的資源が豊富である。それを有効に活用することは、日本にとってだけでなく、世界の財産にもなる。

8 創造性と独自性こそ、これからの世界文明に貢献する道である。世界平和に寄与することとはその創造性、独自性のうえに立って、幅広い寛容の精神を貫き、人間対人間の真心の対話をくり広げていくことである。

9 これからの日本進路としては、簡単にいえば平和の要となり、文化の輸出国になる以外にないと思っている。人類の文化に貢献しうる創造のダイナミズムをもって進んでいくべきだ。つまり日本を文化の宝庫に。

10 「魂魄をとどめる」とは、わが魂はここにありと、心を定めることだ。

11 清新の息吹きも歳月とともに失われ、惰性化していくのが世の常である。しかし、そうなれば新しい発展はない。惰性を破るには原点に立ち返ることだ。

12 人間が直面する課題は、常に新しい。昨日と全く同じことなど何ひとつない。ゆえに大切なのは挑戦への情熱である。

13 勇気である。行動である。最善の道を究めようと試行錯誤を重ねていく挑戦の軌跡が、やがて真の経験となって結実するのだ。

14 大事は、一朝一夕に成就するものではない。二代がかり、三代がかりの作業となることもある。師弟が一体となったの不二の奮闘なくして、大業の成就はない。

15 子どもの育成は、未来を建設することだ。ゆえに教育は最も大事な聖業となる。教育への愛も人間への愛から始まる。子どもたちを愛しく思う心の強さから教育への情熱も責任感も生まれるのだ。

16 教育は、人間性をその神々しい完成の域へと高めるための手段である。その基本は、人間と人間との真剣な魂の触発にこそある。

17 教育の結実には歳月が必要である。粘り強く語らいを重ね、薰陶していくなかで、人間は目覚め成長していくのだ。

18 「まずやってみる、やってみれば初めて分かることがあるはずだ」。分かったことを経験にして、次のステップに進んでいくということだ。

19 失敗を恐れず「挑戦の一步」を踏み出す勇氣。成功も挫折も糧に。次なる「前進の一步」を重ねる勇氣が夢を花開かせる。

20 強い勇氣があれば、いかなる不幸も苦痛も、自分自身の建設の糧としてわが使命達成の力としていける。

21 世界初の「青いバラ」が発売され、話題を呼んでいる。サントリーが開発した。

22 三日坊主にならないためには、面白そうなことだけやればいい。人は基本的には好奇心を持つ動物だから、何か刺激があるとすぐに反応する。

23 「好きこそ物の上手なれ」で興味を持っていけば、自分からその世界に入っていける。好きなら努力も工夫も厭わない。だから成果も挙げられる。長続きもする。

24 勉強しないと賞味期限の切れた人になる。いま、最先端の技能も経験も知識も、一年で陳腐化する時代である。そんな変化に対応するためには、常に勉強をして自分を磨くことが必要となる。

25 体で覚えたことは一生忘れない。技術は教えることができるが、技能は教えることができるできない。技能は本人の努力によって、身につけることが必要だ。技術は物質的な世界。技能は能力次第。日本は技術立国といわれるが、技能立国といわれたい。

26 教育とは、一次元からいうならば「心の砂漠化」との間断なき精神闘争である。

27 何のために勉強するのかといえば、それは未来のためである。そして、そのためには

先見性を磨くことが大切である。

28

知識は溜め込まないで吐き出す。学んだ知識と経験を材料に、どれだけ充実した人生を送れるか、そのための知恵を発見するためのものだ。お金も「貯めるばかりでなく、生かして使え」とよくいうが、知識も同じである。

29

対話に上手な人は「相手のことを話題にすれば相手は何時間でも話をしてくれる」ことを知っている。

30

人間の心には、もともと子供の心、大人の心、親の心という三つの心が備わっている。魅力のある人は「子供の心」を忘れない。

31

三つの心にはそれぞれ特徴があつて、好奇心が一番豊富なのは、子供の心とされている。だから、好奇心を発揮するためには封印されてしまった子供の心を取り戻すことが必要なのだ。人間が基本的に持っている三つの心は、年齢がいくつになっても変わることはない。

32 聞き上手になるには、ただ傾聴するだけでなく、ときどき質問してみるとよい。質問されると相手は、「自分の話をよく聞いてくれている」と思うので、ますます気分が良くなり、普段は人に言わないようなことまで話してくれる。

33 人事こそ、一切を決する最重要事である。「善の意欲をかき立てるのに最も威力のあるものはよい生き方のお手本である」。

34 人生に波乱や試練はつきものである。その時に、どうやってそれを乗り越えていくか。その苦闘こそが人生の宝となり、わが生命を輝かせていくのだ。

35 人生を過ごして苦勞していない者、これは本物ではない。人間の虚像だ。人生を通過しただけで生きていない者だ。

36 目標をもつとは、希望をもつことである。それは青春の光となり、人生の力となる。

37 赤裸々な体験には、人間の素顔があり、人間性の温もりがある。そこに人は同じ人間として共感を覚え、心を開くのである。

38 誰かを守ろう、育もうとすることによって人は自らを強くし、成長させることができる。「奉仕の人生こそが唯一の実り豊かな人生である」。

39 「楽しく」ということが、人生のポイントだ。何にでも苦労や困難はつきものである。それを嘆くのではなく、楽しみながら挑戦していく。そこに幸福の道を開く要諦がある。

40 人は義務感だけでは力は出ない。挑戦に喜びを見だし、楽しんで頑張っている人には誰もかなわない。

41 自分の「宿命」はことごとく「使命」として開花していくのだ。情熱の炎こそが、困難も労苦も焼き尽くす力となるのだ。

42 いかなる壁をも打ち破る大勇気を持つべきである。一人立つ勇気を持つのだ。勇気と努力で新たな勝利の突破口を開こうと決意することだ。

43 組織の上の人間が威張ることなく、皆に尽くす。幹部自身が気取りを捨てて、どこまでも真剣に戦うことである。心のギアを合わせていくのだ。

44 「平和」を創るのも「人間」である。

「文化」を創るのも「人間」である。

「繁栄」を創るのも「人間」である。

45 その人間を創り育てゆく聖業こそ「教育」である。ゆえに「教育」に邁進した人こそが究極の勝利者である。

46 ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨くことができない。人間は人間によって、鍛えられ光を放つ。「教育」とは、生命の尊厳の原石を最高に研磨しゆく真剣勝負といつてよいであろう。教育とは勝利の力を漲らせゆく源泉である。

47 苦しんだ人間こそ他者を思いやることができる。「人生はマラソンだ。諦めず最後まで走り抜いた人間こそが勝利者となる」。

48 失敗の言い訳を探すのではなく、次に成功するための道を見出ししていくのだ。乱世であるほど何ものにも屈せず、断固として価値創造していく人格の教育が要請される。

49 戦いなくして成長はない。厳しい逆境があつて、初めて最高の力を出すことができる。勇氣ある人は前進を止めない。

50 どんな苦しいことがあつても、これが当然だ、うんと苦勞しようと思つて、頑張り抜いてほしい。あなたの人生の苦勞をここで開花させるのだ。つまり一切の経験を生かし切つていくのだ。そのため、これまでの人生である。

51 「感動は心の中に起きる地震である」。「感動は心の扉を開く」。仕事も感動がなくなると情性が始まり、マンネリ化する。自分が感動していなければ、人を感動させることはできない。仕事に感動があるからこそ、客の心をつかむことができる。

52 現場では臨機応変な対応が必要となる。マニュアル（手引書）通りには事は進まない。大切なのは機転である。機転とは智慧と責任感の産物である。

53 小事が大事である。大雑把は油断、準備不足は慢心。人生も、仕事も事前の準備を怠るな。

54 よき人は、よき人につきあつてゐる。偉大な人は、偉大な人を離さないものである。

55 一番貧しい中で、一番大変な中で、一番陰で戦った人こそが本当に偉大な人間になるのだ。

56 未来を開く鍵は「こうしてみせる」との強い一念にある。深い決意と実践でわが壁を破りゆく日々でありたい。

57 小さなことを見過ごすことが、大きな事故につながりかねない。誰も気にとめないような細かいこと、小さなことにも気を配り、完璧にしていこうという行動こそ、責任感の表れといえよう。

58 これまで大丈夫だったからといって、今日も大丈夫であるという保証はない。毎日点検し、万全を期すことが無事故を貫く要件である。

59 人間として、人間を尊敬するということが、あらゆる高貴な感情の基礎である。

60 大誠実で心を結べ、大変な時ほど励まし合うのが友情だ。何があっても崩れぬ強き信頼の絆を。

61 歩いた分、前進できる。進んだ分、道が広がる。人生に平坦な道のりなどない。しかし苦しんだ分だけ、自分が幸せになれ、人を幸せにできるのだ。

62 勝敗を決するのは、最後の最後の仕上げまで戦い抜く勝利の一念である。具体的な実践とは、目の前の「一人」を励ますことだ。誠実に「一対一」の対話と友情を広げることだ。

63 約束は成長の種子である。約束したことを果たそうと心に決めて、日々努力していくなかに人間は成長を遂げていくのだ。

64 未来に希望があれば人生は幸福である。未来への挑戦があれば、生命は躍動する。羽ばたけ大いなる明日へ、人類の平和と勝利のために。

65 基本を教え込むには、忍耐強さが求められる。地味で目立たぬ労作業である。しかし、そこからすべては開花していくのだ。

66 人を育てることは、自分を磨き、自分を育てていくことでもある。

67 言葉は人間を近づけて親しくさせる。あいさつは、社会の第一歩である。自信は積極性の原動力となる。

68 真心には国境も年代の壁もない。相手を思う一念からつむぎ出された言葉は、魂の共鳴板を激しく叩くのだ。

69 人生の崇高な意味を自覚する時、生命に内在する無限の力がほとばしる。

70 「若さ」とは「生命が貯えている豊富な成長力」である。さらに「一切を突破する力」であり、そして「一切を明るくする太陽」である。(与謝野晶子)

71 人間の「幸福」とは何だろうか。「自分の才能を十二分に発揮できることである」。(ナポレオン)「自らの可能性を信じよう。一人の人間には、時代を変える力がある」。

72 「建設」とは「勇氣」の異名であろう。「勇氣があれば、道はいつでも拓ける」。(ナポレオン)

73 「向こう三軒両隣」と仲良くすることは、人間社会の普遍の知恵である。それは、国際

関係においても、何ら変わりがあるまい。なかんづく今日は、人類史上最も相互依存の進んだ時代である。経済しかり、エネルギー問題しかり。地域の安全保障しかり。どの国も一国だけでは成り立たない。大局観に立つて、互いの利益の方向へ手を携えることが、外交の大原則であろう。

74 「希望。これこそ人生の秘密兵器だ!」。しかし今、希望はどこにあるだろうか? 「みんな生き方をしたい」という模範が見えなくなつた。

75 心が希望で燃えているとき、人は暴力的にはならない。生きる意味が見いだせず、心が空っぽになるとき、言動がささくれ立ってくる。何が必要なだろうか? 「大人の責任である。『人への思いやり』を、家庭でも、社会でも、大人が実行していかなければならない!」。

76 運命とは、原因、結果の法の枠外にあるものではなく、より深い法のうえでの原因、結果の現像のあらわれにはかならない。それを偶然と考え、運命とよぶのは、その法の実在を知らないからである、といったら言い過ぎであらうか。

77 ただ、人はこのおのおのが生きうる人生に真剣にとりくみ、偉大な仕事をなしとげる  
ことによつて、50年の人生を100年にも千年にも匹敵させるものとする事ができる。

78 真の長寿は、この肉体が何年間生体活動をつづけたかではなく、この生命がどれだけ  
の仕事をやりきったか、によつて判定されるべきものなのであらう。

79 一生といつても現在の一瞬の積み重ねである。今日を充実させられない人に、あすの  
開花はない。瞬間を大切に出来ない人が、いくら百年の大計を口にしても絵にかいた  
餅にすぎない。

80 過去の因も、未来の果も、一瞬の諸法実相に凝縮されているのであり、その一瞬の転  
換が、過去久遠よりの罪障の消滅も、未来の続きゆくであらう永劫の福運も、決定し  
ていくものである。

81 男の本領は仕事である。家庭がそのまま仕事の場合は、子供は仕事に打ち込む父親の  
姿を見て、そこに名状しがたい畏敬の念を覚えるのである。

82 母性愛のない女性はいないように、それを求めない子供もいない。子供が一人前の人間として育つ最大の土壌は、母の心であり、母性愛である。

83 父親は子供たちの味方になることだ。特に男の子に対しては、兄弟のような立場でいくことが、一家団欒の秘訣である。

84 いざというときには、厳然と力を示すことである。子供たちは、心から親愛の念と同時に、深い尊敬の念を抱くことであろう。

85 母親に関して、子供のもっともきらいなことは、愚痴をこぼすことである。愚痴つばさは、性格からくるものかもしれないが、努力によつてかならず変えられる。

86 老人問題のもっとも重要なポイントは、精神的な充足感をどのようにしたら与える事ができるかを考慮することである。

87 この点に着目するならば、そのためにとられるべき方法とは、老人を社会の現実から離れさせるようなものであつてはならないということが理解されるであろう。

88 人間の生きがいとは、社会に参加しているという意識に裏づけられてこそ生まれるものだからである。

89 社会から追い出される身ではなく、社会のなかで大事な役割をもつ一人として、積極的に社会に参加し、自らなんらかの価値を創造しつつあるという実感が、老人の最大の生きがいとなるのではないだろうか。

90 老人の特質として、一つの仕事に忍耐強く取り組みること、そして、責任感が強いということがあげられる。肉体の衰えは避けられないにしても頭脳、精神活動は、年齢の割にはさほど衰えない人がたくさんいる。

91 その長い、豊かな人生経験に支えられて、さらに輝きを増していく例も数多くある。こうした老人の特質を生かせるような職業に従事させることによって、自己の存在が社会にとって不可欠なのだという自覚を与えることがもつとも肝要なのではないだろうか。

92 すべてを失ったとしても、希望さえ残れば、そこからいつさいが再び始まる。希望は

つねに出発であり、永遠の始まりである。

① 目標をもつことは、希望をもつことである。目標が定まれば、一足一足の歩みにも力がこもる。

② 偉大な人間だから偉大な仕事を成し遂げられるのではない。偉大な目的をめざすから、人間は偉大になれる。

③ 希望がなければ、自分で希望をつくれればよい。心は自由自在だからである。

④ 生命力とは、未来を信じる力であり、そして希望を日々新たにし続ける力の異名ともいえる。

93 自分だけの幸福もなければ、他人だけの不幸もない。人を幸福にした分、自分も幸福になる。

94 幸福は、決して山のかなたにはない。自己自身のなかにある。しかし、座して安閑とている自分ではなく、あくまで、かなたにあるものをめざして険しい尾根に挑戦し、障害を一步一步克服して進んでいる。戦う自分。の生命の躍動の内にあるのだ。

95 幸せは追いかけるものでもない。ついてくるものだ。自分で目的を創り、自らよしと

して、悔いなき人生を生き切った人こそ、幸福である。

96

いかなる知性をもつていようが、情熱を失つてしまえば『生ける屍』といつても過言ではない。情熱は幸福の要件である。人生の大部分の幸・不幸というものは、物事に對する情熱をもっているか否かによつて、決まる。

97

人生の勝利も、すべて勇氣から始まる。一步踏み出す勇氣、挫けぬ勇氣、自分に負けない勇氣……勇氣こそが壁を破る。

98

『偉大な人』とは、平凡であることの偉大さを知った人のことである。だから、いばつたり、自分を偉く見せようなどとせず、ありのままに誠実に生きる事が大切である。

99

むしろ、立派そうに見せるために苦勞することは、その人の力のないことを人に示すようである。

100

青春の志に生き抜く、大情熱の人生は崇高である。青年にとつて根本の財産は信頼と誠実である。それらは、一朝一夕には築けない。今、自分がいる足下を大切にし、一

日一日を丁寧生き切っていくなかに信頼、信用という人生の宝が自ずとついてくる。

101

苦勞すべきときに苦勞し、勉強すべきときに勉強するのが、幸福な青春なのである。それが、生涯の幸福の礎石となる。若いときに安逸を貪り苦勞しないのは、もつとも不幸な青春である。自分では自由なつもりでいて、結局最後はもつとも不自由な人生となってしまう。

102

生涯を同じ志に生きる。絶対に信頼を裏切らない。青春の信念と信義を貫いた人は、それ自体、勝利の人生である。人間として勝った人である。誓いとは、人間だけが出来る。いわば人間の人間としての証だからだ。

103

変わらぬ友情は、いかなる宝よりも尊い。策や利害ではなく、友情を結び、友情を大切にする人生こそ光輝く人生である。

104

ひとたび誓った友人との約束を守る。それが友情である。

# 将軍学

其の13

1 〴〵まじめ〴〵と努力に徹した人ほど強い者はない。どこまでも地道な歩みを貫いた人に、人生最終の栄冠は輝く。

2 冬の寒さに耐えて、美しい花が開くように、努力と忍耐なくして、夢の開花はない。

3 人生には、自分が試される、〴〵まことの時〴〵がある。ゆえに、日ごろ、いかなる心構えで生き、どう努力しているかが大事になる。日々、地味な精進を重ねてこそ、いざという時にチャンスをもつことができるのだ。

4 自分のなすべきことに情熱を燃やすことである。今やるべきことに全力をそそげない人に、未来を語る資格はない。足元を着実に固めてこそ、次の大きな飛躍があるのである。

5 思いにまかせぬ境遇に陥ったとき、忍耐という勇気を決して忘れてはならない。

6 尊敬は尊敬を生む。軽蔑を生む自分が変われば、相手も変わる。

7 苦しみに打ち勝つためには、何よりも励ましが必要なのだ。励ましは勇気の母となる。励ましとは、落胆を勇気に転ずる力である。

8 組織は、生命体である。前進するか停滞するか。人の心、とくに中心者の一念で大きく変わっていく。「真剣」に勝る力はない。果敢に困難に挑め。

9 「みんなの気持ちが一いつになれば、なんだって可能なのだ」なんだって喜びは、心を結ぶ。結ばれた心は、新たな力を得て、勢いよく弾ける。

10 リーダーの一人立つ姿に、皆が奮い立ち、前へ前へ進んだその率先の行動によって、時代は音を立てて変わっていくのだ。まず自分が戦う。まず自分が見本を示すのだ。

11 後輩は、ほめて伸ばしていくのだ。それが真のリーダーだ。誠実にやるのだ。自らが打って出て、人と会い、人と語り、熱い握手を交わし、心を通わせていく。

12 幹部の傲慢さや無責任によつて、大切な仲間が苦しむようなことは、絶対にあつてはならない。「仕事」の中にこそ、「喜び」を見出し、最高の充実の人生がある。

13 状況を嘆いたり、人のせいにしても何も変わらない。自分自身が強くなることだ。頭を使い、口を使い、手を使い、足を使い、すべてをフル回転させ戦いを起こしたならば、断じて勝たねばならない。

14 自分が戦つて勝つ。自分が動いてこそ、周りも動いてくれる。自分が動けば、周りは10倍、20倍の力を發揮してくれるものだ。

15 決断である。行動である。動くのだ。一人一人が会社の全権大使であるとの気概で勇んで打つて出よう。リーダーならば、先頭に立つことだ。先頭を行けば当然風圧は強い、それに断固として打ち勝つて道を開いていく、それがリーダーである。

16 人生は変化の連続だ。人間は、やがて年を取る病氣にもなる。そして最後は死んでいく。それが人生の実相である。だからこそ確固たる哲学を持ち、真に価値ある日々を築いていかねばならない。

17 友情こそ人生の宝である。自分から心を開いていくのだ。気取らず、飾らず、どこまでも誠実に、信頼の心を通わせていくことである。

18 「誰か」ではなく、「どこか」でもない。「自分が今いるその場所」が、わが人生の晴れ舞台である。自分しかできない使命の劇を思う存分、勝ち飾るのだ。

19 心に「大きな目標」を持つ人は、それだけ大きな人生を生きられる。自ら決めた目標へ戦い抜く人は最後に勝利する。

20 信頼や友好を結ぶのは、簡単なことではない。しかし、人間として誠実に人の三倍の努力をすれば、必ず心が通じる。その地道な戦いこそが、最も堅実な勝利の道なのである。

21 困難がないことが幸福なのではない。困難に打ち勝つなかに幸福があるのだ。

22 「今は乱世である」非情な戦いが乱世の原理というものだ。我が身を惜しまず、厳しい使命の実現に骨身を削る以外にない。そこに勝利が開かれる。

23 熾烈な戦いであつて、その勝敗を分けるものは一体何か。それはリーダーの一念である。先陣を切る将の姿である。

24 道とは何か。それは、道のなかつたところに踏み作られたものだ。荊棘いばらばかりのところに開拓してできたものだ。

25 教育は、人間に「知」という力を与え、人びとの幸福を、尊厳を、自由を、平等を實現していく必須の条件である。生涯が学習である。生涯が勉強である。それが人間らしく生きるということなのだ。

26 教育の本義は、人間自身をつくることにある。教育は知識を糧に無限の創造性、主体性を発揮しうる人間を育む作業である。

27 内なる可能性の発露こそが教育であり、知識はそれを引き出す起爆剤といつてよい。では、知識を想像へ生き生きと転ずる力とは、いったい何か。

28 それは社会を担う人間としての自覚と責任である。人びとの現実生活を凝視し、その

向上、発展のために習得した豊穡な知識を駆使するなかに創造性の開花があるといえる。

29 人間の真価は、ひとたび險難の峰にさしかかった時に、初めて明らかになるといわれています。前途に立ちばはかる困難をもつて、挫折を自己正当化する手だてとするか、成長への好機と意義つけて進んでいくかで、将来の行路を決定づけてしまうといっても過言ではない。

30 女性を、民衆を賢明にすることが、社会の繁栄を築く根本の改革となるのだ。

31 リーダーならば、生まれ変わった決意で、行動を開始せよ。一日一日を悔いなく勝利の自分史を綴れ。

32 青春の道は、悩みと挑戦の連続だ。君よ断じて負けるな、忍耐の大地にこそ勝利の花は咲く。

33 先輩は後輩を自分以上の人材に。後輩は先輩を追い抜いて進め。切磋琢磨で勝利を。

34 困難の山にも立ち向かっていけ。高きに挑んでこそ、限りない力が発揮されるのだ。

35 今日を勝つことだ。今を勝つことだ。決意した瞬間から新たな人生は開ける。

36 「一人を大切に」時代が求める発展の急所がここに。励ましの波を一波から万波へ。

37 声の力は偉大だ。中心者は元氣いっばいに張りのある声で語れ。友の胸に勇気と自信と確信の炎を点せ。

38 心が通えば、力に変わる。力を出せば、必ず道は開けてくる。また人を励ますことは、自分自身も勇気づける。励ましは人を変え、自分を変えるのである。

39 不幸に泣く人々を励まし、救いゆく行為は、まことに地味な労作業であるが、人間として最も尊い聖業である。

40 今が一番大事である。過去を振り向いてはいけない。振り向く必要もない。未来への希望を大いに燃やして、今、この時に全力をそそいで生きる。その人が、人生の賢

者である。

41 「思いやり」とは「思いを違<sup>ちが</sup>る」つまり思いを他の人まで差し向けることである。慈愛を馳<sup>は</sup>せることである。思いを遠<sup>とほ</sup>く違<sup>ちが</sup>った分だけ、わが心は広がる。

42 恩を知り、恩に感謝し、恩に報いようと生きるとき、人間は、自分自身を豊かに高めていくことができる。

43 苦勞して、自分を育ててくれた親を大切にすることは、人間として、根本の道である。恩を受けながら、その恩に感謝し、報いることができる人間に、人を救うことなどできない。

44 周囲の人に感謝や尊敬の心をもたなくては、どれほど力があっても結局は孤立し、せつかくの力も発揮できずに終わってしまう。感謝や尊敬の心は、その人の人間としての大きさの証しである。

45 感謝がない人間は、人が自分のために、何かしてくれてあたりまえだと思っている。

結局、人に依存し、甘えて生きていくといつてよい。だから、人が何かしてくれないと、不平と不満を感じ、いつも、文句ばかりが出てしまう。そして、少し大変な思いをすると、落ち込んだり、ふてくされたりする。それは自分で自分をみじめにし、不幸の逆路をさまようことになる。

46 あいさつは心のドアを開くノックである。さわやかで感じのよい、あいさつの姿には、人間性の勝利がある。

47 人間は、たった一言の言葉で、悩むこともあれば、傷つくこともある。また安らぎも感じれば、勇気を奮い起こしもする。ゆえに、言葉が大事になる。言葉への気遣いは、人間として配慮の深さにはかならない。

48 人生にあつて笑いが無いということ、花がパツと開かないのと同じだ。いかに葛藤に満ちた社会であつても、ユーモアだけは忘れたくない。

49 「仲良くしていこう」と思える人は幸せである。「仲良くしていこう」と心を配り、行動していける人は立派である。心がきれいであり、豊かな人である。

50 人生の年輪を重ねるごとに、心がいよいよ若さを増していく。つねに「さあ、これからだ」と力強く前進する。これが真の健康である。本当の長寿である。

51 本来「老い」の意義とは何か。それは、若かりし日を思い、感傷にひたる時期などではない。最も莊嚴にして悠然と光を放ちゆく深紅の夕陽のごとく、最も生の充実を圖るべき、人生の総仕上げの時ではないだろうか。

52 いっさいは、自分の心をどの方向へ向けていくかに、かかっている。老いを、単に死に至るまでの衰えの時期と見るか、それとも、人生の完成へ向けての総仕上げの時ととらえるか。老いを人生の下り坂と見るか、上り坂と見るか——同じ時期を過ごしても、人生の豊かさは天と地の違いがあるのだ。

53 人間誰しも、肉体的には必ず老いていく。若いときのようにはいかない。病気になることもあるだろう。健康のための賢明な知恵も必要である。

54 しかし、「もつと働こう！人々のために！未来のために！」とつねに前を向いて進み続ける心を、最後まで失ってはならない。その心のなかに澆刺とした長寿の秘訣、健康

の秘訣がある。

55 笑顔は、幸福の結果というよりも、むしろ幸福の原因だといえよう。

56 労苦と使命のなかにのみ、人生の価値は生まれる。この世に生まれてきたということとは、尊い使命をもっているということである。使命のない人はいない。未来に羽ばたく使命を自覚し、努力を重ねていったときに才能の芽は急速に伸びる。

57 使命とは、誰かから与えられるものではない。自らが決然と選びとるものだ。その自覚こそが、すべての挑戦への希望となり、困難を克服しゆく大きな力の源泉となっていくのである。

58 一生を何に捧げるのか。それによって人生の価値も深さも決まる。人生は厳しい。その人の真実は、そのまま人生の最終章に結晶されるのである。ごまかしはきかない。善も悪も、正も邪も人間の晩年は鏡のごとく、その人の生涯の軌跡を映し出す。

59 信用こそ財産。人間にとって、信用ほど大切なものはない。信用こそ最高の財産である。

60 社会の矛盾を嘆くだけでは何も変わらない。まず自分自身が強くなり、賢くなり、輝いていくことだ。それが、必ず社会を変革する力となる。

61 真の正義とは、民衆の幸福であり、平和でなければならぬはずである。いかなる大義があろうとも、そこに不幸な人々がいるかぎり、正義は存在しない。

62 正義といい、人権といっても、人が人を犠牲にしないことである。他人の不幸の上に自己の幸福を築かない、ということだ。

63 正義など、どうでもいいというのは気楽かもしれないが、その代わり人生の本当の深さも、喜びも、充実も、向上も、価値も、幸福も、何ひとつ味わえない。ただ欲望に流されていくだけのつまらない人生である。

64 悪と戦わずして、正義はない。悪と戦わずに見て見ぬ振りをしていけば、自信が悪に通じてしまう。ゆえに、正義は断じて強くあらねばならない。正義とは勇氣である。

65 正義感を決して失ってはならない。世間ではよく「清濁併せ呑むせいだくあわ」ということが度量

のようにいわれるが、不正、不純を容認し、それに慣れてしまえば、自分自身が濁っていく。そうなってしまうは本末転倒である。

66 人間は他人との交流がなくては、また、他人からの働きかけと、他人への働きかけがなくては、自己を完成することはできないのである。

67 友情という絆を結ぶなかで、個人のもつ勇気が、力が、発揮されるのである。

68 人生の「原点」を持つ人は強い。「原点」に立ち返ることが、人生を切り開く「知恵」となっていく。その「原点」とは例えば、自身がこの世で果たすべき、自らの使命の自覚でもある。

69 苦境と格闘するなかで、より大きな自分を築く。「知恵」こそ根本でなくてはならない。苦しい時、「社会が上り坂の時なら、だれでもうまくいく。下り坂の時こそ勝負です」その人の本当の心がけが試されるのです。

70 歯を食いしばって、頑張ったその挑戦のなかから、不可能の壁を破る突破口が見つかつ

た。うれしかったという人生を生きることだ。

71 大事なことは「自分の使命に生きることだ」生活に、苦しいことがあっても明朗であれ。自分が託された使命の舞台で日本一を目指せ。

72 自分の今いる職場こそ、勝利の使命の舞台である。「今日という日を、あなたにとって新しいはじまりにするのだ。」

73 物の見方に、その人の境涯が表れる。毎日が「同じまま」に見える、それは自分が「同じまま」でいるのかもしれない。

74 若さの秘訣は「常に新しいことを学ぶこと」どんな小さなことでも「面倒くさい」といった言葉を捨て、新たな挑戦の一步を踏み出そう。

75 人間が情熱を燃やし、信念を貫き通していくには「人の存在」が不可欠なのだ。そのために、善き人間関係を築く組織がどうしても必要になってくるのだ。

76 自分を信じ、期待してくれている人がいる。そう自覚する時、人は大きな力を発揮することができる。

77 人を育てるには、大きな責任をもたせ、実際にやらせてみるのが大切だ。人は責任を自覚し、真剣になることによつて、力を増すものだからである。

78 聡明な人事は、組織を潤沢にし、人材を伸ばす。愚かな人事は、組織をこわし、人材を殺してしまうものである。

79 どんなにささいなことであっても物事を軽視する態度は、敗北につながる。安易な考え方に勝利はない——安直は建設の敵であるからだ。

80 綿密な計画、冷静な分析、周到な準備、そして慎重な遂行——そこに人知のかぎりをつくしてこそ、勝利の光が見えてくる。

81 いかなる次元であれ、戦いというのは、つねに知恵と知恵の勝負である。現実動きをどう読むか。そのうえで、どう手を打つか。この「知恵比べ」を制したものが、栄

冠を手にする。これは、時代や社会を超えた、勝負の鉄則である。

82 勝ったときに、成功した時に、未来の敗北と失敗の原因をつくることもある。負けた、失敗したというときに、未来の永遠の大勝利の原因をつくることもある

83 信念は目に見えない。しかし、信念こそが歴史を一步前へと前進させる無限の力をもっている。その力を信ずることである。その力を発揮することである。その力を証明することである。

84 社会の場での戦いは、信用の積み重ねが大事である。それには、誠実、誠意、真心以外にない。

85 就職すれば、まったく不得意な仕事をしなければならぬこともある。いやな上司や先輩がいて、人間関係に悩み抜くこともあるかもしれない。しかし、仕事とは挑戦である。そう決めて、職場の勝利者をめざして仕事に取り組むとき、職場は、自分を鍛え、磨いてくれる、人間修行の場となる。

86 自分がいる、その場所で信頼を勝ち取ることだ。その部署で、第一者になることである。また、仕事で実績をあげるとは当然だが、まず、朝は誰よりも早く出勤し、元気なあいさつで、皆を迎えることだ。朝に勝つことだ。

87 人は、日の当たるところにいて、期待され、称賛されているときには、はりきりもする。だが、その部署や立場を外されたときに、どこまで真剣に、意欲的に仕事に取り組んでいけるかである。

88 華やかさもない苦勞の多い職場や、自分の希望と異なる部署に配属されたときに、頑張り抜けるかどうかである。実は、その時こそ、人間としての真価が問われているからだ。

89 勝つことだけが人生ではない。勝とうと背伸びして道理に外れてしまつては、何にもならない。負けないという人生は、永遠に勝ちである。勝つことよりも負けないことのほうが、偉大な勝利なのだ。

90 もつとも不幸を味わつた人こそ、もつとも幸福になる権利がある。自分に負けないか

ぎり、いつか必ず、開けるときに訪れる。自分を卑下してはいけない。自分を大事にするのだ。

91

誰もが困難な課題や苦悩をかかえている。悩みがない人などいない。みんな、そのなかでそれを克服しようとして、必死になって努力し、泣くような思いで挑戦している。それが生きるということだ。

92

苦しんでいるときは、この闇が永遠に続くような気がするかもしれない。しかし、夜は必ず朝になる。冬は必ず春になる。永遠に続く夜も、永遠に続く冬も絶対にならない。

93

誰よりも苦しんだ人は、誰れよりも人の心がわかる人になる。その人こそが、偉大な使命を果たせるのだ。

94

困難な悪条件をかかえているということは、それだけ、使命が大きいということである。その障害を克服し、勝利したときには、同じ苦悩を持つ人々に、いや万人に、新しき勝利の大道を示し、希望を与え、活力を与えることになる。

95 優秀な人とは、人間として、誰が「優れた」いるのか。それは人の心の痛みを分かち合える「優しさ」をもつ人ではないだろうか。その人こそ「優秀」な人なのではないだろうか。

96 偉ぶつてはいけない。偉く見せようとすることもいけない。また偉くさせてもいけない。謙虚であることが尊く強いのだ。

97 師という原点をもつ人は強い。原点を忘れない。原点を忘れないければ、人間は、進むべき信念の軌道を見失うことはないからだ。

98 生き方は、単なる知識のように伝えられるものではない。全人格的な関わりを通じて、はじめて伝えられるのだ。そこに、師弟の意義と重要性がある。

99 人の一生において最も大切なのは、誰を師とし、誰を模範とするかであるといつてよい。人生の師をもてること以上に幸福なことはない。

100 今日、師弟というと、なにか時代錯誤的な、封建時代の遺物のような印象を抱く人も

少なくない。しかし、いかなる道を極めるにも、師が必要である。

101 師弟とは、同じ理想を分かち合い、その現実に向かって戦う最高無二の同志といえるのではないだろうか。

102 師弟は、いわゆる徒弟や、主従とは、根本的に異なる。後者を一方的な上下関係とすれば、師弟は平等な人間主義の結合である。そこには、弟子の自発の行動がある。師匠の慈愛がある。

103 人材は、いる。さがせば見つかる。しかしリーダーに私心があれば、まじめな人材ほど苦しむことになる。反対に、リーダーが無私であればあるほど、その「無私 of 真空」に引き込まれるようにして、よき人材が集まり、衆知が集まり、民衆の信望が集まってくるものだ。

# 将軍学

その 14

1 負けない人が勝利者。負けないことが幸福だ。君よ強くあれ、心通う語らいは、生命の喜びの花。勇気の対話で平和と友情の花園を。

2 「教育」は「共育」（共に育つ）である。自分が成長した分だけ、後継の人材も共に成長するのだ。

3 時代は、富から徳の時代が変わって来ている。富は、金の切れ目が縁の切れ目。徳のつながりは、時と共に切れることはない。

4 人間の真価というのは、学歴や立場、肩書きによって決まるのではない。信義を守るかどうか、誠実であるかどうか、真剣であるかどうかである。そして、シ信義の人、シ誠実の人、シ真剣の人には、人間性の光彩がある。

5 読書の大切さ。たった一つの言葉にも、人生を変える力がある。たった一冊の本にも、

時代を動かす力がある。

6 「一書の人を恐れよ」といわれる。自分自身の座右の書をもつ人は強い。心に不動の柱ができる。いかに時代が変わり、社会が変わろうとも、惑わずに進むべき人生の針路を指し示す、確かな羅針盤をもつことができるからだ。

7 一冊の良書は、一人の偉大な教師に出会うようなものだ。青年時代、なかんずく少年時代に良書と出会うことの重みは計り知れない。

8 読むことは「心を耕すクワ」といえる。じつは、本そのもののなかに、知恵や幸福があるわけではない。本来、それらは全部、自分のなかにある。しかし、読書というクワで、自分の心、頭脳、生命を耕してこそ、それらは芽を出し始める。

9 読書を通して、幾多の偉人の波瀾万丈の人生を追体験したり、歴史上の英雄と対話したりすることは、最高の人間学となり、知恵の源泉となる。

10 歴史観とは人間観である。歴史を学ぶことは人間を見る目も豊かにする。正しい歴史

観には、正しい「人間観」、「社会観」、「生命観」が必要である。「それが人間を、幸福にしたかどうか」という観点で、すべてを検証し直すことだ。

11 これまでの歴史は、往々にして「権力者中心」、「政治中心」、「国家中心」の歴史であった。これを「民衆中心」、「生活中心」そして「人類的視点」の歴史に書き換えなければならぬ。

12 過去の歴史の真実を見きわめるのは至難のわざである。とくに歴史書は、ほとんどが勝者の歴史である。「勝てば官軍」というのか、勝ったほうが正義とされる。負ければ悪人にされる。そこを見なければいけない。

13 「史観」と「史眼」が大事である。レンガを集めただけでは家は建たない。事実を集めただけでは歴史は書けない。そこに「どう事実を組み合わせたか」という、歴史を書いた人の哲学が隠されている。それを見抜くことだ。

14 歴史を学ぶことは、自らの生き方を探求することである。そして、歴史を学ぶことによって、人間は自らを高め、外なる権力や内なる感情などに左右されることのない、聡明

な自分自身を築きゆく未来への一步を踏み出すことができるのだ。

15 時代は、女性の持つしなやかな想像力、優しさ、温かさ、人間味などが社会に反映されることを求めている。モノや効率ばかりを追うような社会から、心の通う人間らしい社会に戻していくには、女性の力が不可欠なのである。

16 政治にしろ、市民運動にしろ、現実に根ざした女性の意見が反映されてこそ、地に足のついたものになる。

17 苦しみに打ち勝つためには、何よりも励ましが必要なのだ。励ましは、勇気の母となる。「君には君にしかできない使命がある」。

18 心の奥の、秘められた感情や情緒に、ものの見事に反応する力は女性に与えられた天分でもいえよう。それこそが、子を産み育てゆくという、宇宙全体から託された役割をもつ、女性の本然の力であろう。

19 男性的なものの方が支配的であったこれまでの歴史のなかで、ともすれば、女性の

真の偉大さ、その勇気が生み出す力は、過小評価されてきた。しかし、実のところ圧政や不条理を許さず、精神の力をもって新しい歴史の突破口を開いてきたのは、女性だったのではないだろうか。

20 自分が今いるその場所で、身近な現実を決して疎かにせず、縁する人々を大事にし、生命を大切にしようとする——こうした女性の知恵と力が伸びやかに反映される社会でこそ、地球的課題の打開も、世界の平和も堅実に前進していくに違いない。

21 女性の生き方、教養と品格のある女性。その知性と優しさのなかにこそ真の美しさが輝く。周囲に信頼と安心を広げることができる。

22 女性の場合、決していわゆる青春時代のみが花なのではない。若い時代にどんなに華やかであったとしても、その幸福は浅いものだし、また一生続く保証もない。長い目で見た時には、心にしつかりした芯をもっている人は、時とともに輝いていくものだ。

23 腹を決めた男は無敵だ。成し遂げようと決意した事を先に延ばすな。

24 「誰か」ではない。「自分」である。自分が勝つことだ。自分に勝つことだ。その姿こそが、皆に勇気を波動させていくのだ。

25 新年度は、わが組織の最前線に「新しい力」、「新しい人材」が生き生きと躍動することだ。生命は、瞬時も立ち止まらず変化する。新陳代謝を繰り返して、自らを革新していく。このダイナミックに変わる力そのものが、生命の本質といってよい。

26 組織を一つの生命体とみるならば、「新しい力」、「新しい人材」の台頭は、本然の正しき法則なのだ。

27 本当の勝利を得るためには、組織を動かすのではない。徹して一人また一人と会い、その心に炎を点していくことが、大勝利に繋がっていくのだ。

28 人に親切にしてあげれば、自分が守られる。新しい息吹きを受けて自分が学べる。自分が元気になる、向上できる。

29 結婚は、それ自体が目的ではない。大事なことは、あくまでも一人の人間としての尊

30 厳である。人は、誰も皆生まれてくるときも一人、死んでいくときも一人である。結婚するかどうかなどで、幸福は決まらない。幸福を決めるのは、生き甲斐があるかどうか、充実があるかどうかである。

31 夫と妻は互いに向き合った相対的な関係であってはならない。共に新しい人生の目標に向かって進む、共同体の主体者であり、建設者であるはずだ。

32 親子には血のつながりがある。しかし、夫婦はもとは他人である。当然、育ってきた環境も違う。他人同士の共同作業であるがゆえに、結婚生活は、相手を理解していうという努力と忍耐の旅と違ってよい。

33 言葉は、人間関係を円滑に導く、橋渡し、だ。だが今、対話を断ち切ろうとする、素っ気ない、冷たい言葉があふれていないか。心を傷つける言葉が横行すると、人間も社会も病んでいくばかりだ。

34 何事かをなすには、周囲の理解と協力が必要である。それには、決して周囲に甘えるのではなく、どこまでも自己に厳しく挑戦していくことを忘れてはならない。その真

剣な生き方に人々は共感し、支援もしてくれるのである。

34 「世界で最も聡明な人間とは、最も誠実な人間のことである。なぜなら、最も誠実な人間であつてこそ、はじめて歴史の試練に耐え得るからだ」。

35 「忘るるな原点！築こう伝統！」。会社が何をしてくれるかではなく、自分たちが何をするかだ！伝統は、自分たちの手でつくつていくものだ！

36 「仕事が人をつくる」。多くの人には知られなくとも、多くの人の役に立つ仕事を誇る職人魂である。

37 事を成し遂げるには、人知れず陰の苦闘があるもの。そうした時「自分を知っている」人がいれば、どれほど心丈夫であろうか。

38 「すべてをわかってくれている人がいる」。それだけで人は「生きゆく力」を得られるものである。

39 相手に感動を届けるには、何より自身の人間的向上が欠かせまい。血のにじむような  
不断の努力が必須である。併せて、自身の生命力を高め、人格を磨く活動が大事になる。

40 「使わないと古くなる、よく使うと新しくなる」。どんどん頭を使うことだ。使えば使  
うほど新鮮な智慧がわく。

41 一言の励ましが、人を奮い立たせることもある。「声」は勇気を呼び起こす新風となる。  
心の響きが大事である。

42 夫婦は人生の伴侶であると同時に、よき友人であるべきだ。友であれば当然、助け合  
うべき存在だ。そこに妥協などない。互いの成長のために叱咤もすれば、手も取り合う。  
傷つき、悩んでいる時には励ましの言葉を贈り、嬉しいときには共に喜ぶ。夫にとつ  
て妻はそうあらねばならぬだろうし、妻にとっての夫もそうである。

43 母こそ、子どもにとって人生における最初の教師にして、最良の教師である。子ども  
にとって、母親から激励され、ほめてもらった記憶は、嬉しく、いつまでも忘れない  
ものである。

44 母は偉大である。母は勇敢である。母は聡明である。母は正義である。その母たちが、幸福に輝いていてこそ、平和と希望の園が広がるのだ。

45 母は、大邸宅や、庭園がなくても、平気である。お金がなくても、名誉がなくても、平然としている。愛する主人がいかなる立場であろうが、達観している。わが家こそが、宮殿であり、心のなかには、無限の財宝を持っていることを知っているからだ。

46 人の美しさを始めば、自分本来の美しさも消える。人の美しさを讃えれば、自分の本来の美しさは倍加する。

47 「誠の『信』」とは、友に対すれば、誠実と友情となる。社会に対すれば、良識と礼節の振る舞いとなり、家族にあつては和楽となり、職場に臨んでは、厚き信頼の人となる」。

48 体験には、現実には立ち向かう人間の苦悩があり、挑戦があり、実証がある。それゆえに、体験には説得力があり、人の心を動かすのだ。「教育には、知識のみでなく、長い人生を、生き生きと生き抜いていく力を育むことが大切である」。

49 幹部は、全社員の幸福のために「信念」と「情熱」と「勇氣」と「努力」と「包容力」そして「責任感」を持ちゆくリーダーたれ。

50 信念は、貫いてこそ信念。誓いは、果たしてこそ誓い。友情は、不変でこそ友情。

51 柳生家の家訓

「小才は縁に出会って縁に気づかず」

「中才は縁に気づいて縁を生かせず」

「大才は袖すり合う縁をも生かす」

52 自らが苦闘を経てこそ、人を真に励ますことができる。労苦は、人間を磨き、深める。

53 苦労の度が深ければ深いほど、その体験は多くの人に、希望を与えることができる。自分の労苦は、人々の光となる。

54 置かれた状況が厳しければ厳しいほど、人間修行の環境が整っているということだ。英知を磨くだけでなく、苦労を重ねてこそ、本当の人間的な成長がある。

55 たとえ、英知を磨いたとしても、苦勞しなければ懦弱な人間になってしまう。だから、苦勞が大事なのだ。勇んで今の苦勞を担っていただきたい。

56 使命感に燃えて、努力に努力を重ねていった人こそが天才であり、天才とは「努力の人」である。

57 教育や訓練が実るかどうかは、必ずしも年数では決まらない。触発によって使命感を与えた時、人間は大きな力を発揮していく。

58 使命を自覚するならば、一人ひとりの無限の可能性が開かれていくことは間違いない。

59 他人を教育することは易しい。自己自身を教育することは難しい。生涯確たる軌道に乗りながら、自己を教育していくところに成長がある。

60 自己に勝つことから、すべての勝利が始まる。ゆえに、自分に勝つ心を培うことである。他人との比較においてではなく、自分自身に根を張った人間の王道を自分で見いだして、自分でつくり自分で仕上げていっていただきたい。

61 名誉や、有名であるといったことなどにとらわれるのではなく、生涯勉学を深めながら、自分らしい、無名の王者の道を生きていたいただきたい。

62 名誉や名声を追い求め、自分を見失ってしまふ人がいる。大事なことは、自分を見つめ、自分を磨くことだ。そこに、真の充実と勝利と幸福がある。

63 リーダーシップとは、何をすべきかを知る智慧であり、それを最後まで徹底的にやり抜く勇気である。

64 大学を卒業したといっても、ただ大卒の資格を得ただけで、学問的にも人間的にもなるの成長もなければ、大学に学んだ意味はない。それは虚像にすぎない。

65 それに対して、真剣に学問に励んでいる人は知性が輝き、人格も磨かれる。人間完成に向かって成長を遂げていく。

66 無名でよい。否、無名であって「あの人のおかげ」でと、幾多の庶民から感謝される人生ほど、尊く気高い劇はない。

67 立つ時は今だ。打って出る時は今だ。勇氣凛々と、自信満々と！

68 大事な名将の要件は何か。それは、いかなる難事をも断固と成し遂げゆく、わが不屈の実行力と闘争心であろう。

69 一人の男として、何があるうが自分は逃げない、責任を果たしてみせると勇気を奮い起こす時、汝の本当の力が現れる。「一人立てる時に強き者は、真正の勇者なり」。

70 「学は光、無学は闇。知は力、無知は悲劇」。リーダーは常に研鑽せよ。生命力も満々と、皆の心をつかむ魅力ある話を。

71 青年の情熱は尊い。しかしまた40才、50才、60才、70才、さらに80才と年輪を刻みながら、なお消えることなき情熱こそ本物である。

72 人生の真価は、最晩年をどう仕上げたか、何を成し遂げたかで決まるのだ。

73 大変な時は励まし合う。うれしいことがあれば共に讃え合い、前進していく。そのた

めの組織である。何でもいい、一步を踏み出すことだ。

74 本来、自らの学識や力を生かして人々に尽くす指導層が、権威をふりかざして威張り正義の人を迫害する、それは卑劣な増上慢だ。本質は臆病なのだ。

75 自分が信頼される人になれば、人々は自然とついてくる。自身が一人立って戦いを貫けば、必ず仲間は守ってくれる。

76 人は思うように行かない時や苦境に陥った時、弱気になり「戦う心」を失いがちになる。しかし、<sup>〴</sup>あと少し<sup>〵</sup>、<sup>〴</sup>もう一回<sup>〵</sup>と「逃げ出したい心」と向き合い、戦い続けた時こそ大きく成長できる。

77 教育の目的は何か。その一つは、一人一人が自己の可能性を発揮し、幸福な人生を築くための「人間力」を培うことにある。

78 知識や学力は当然、大切だ。しかし社会の荒波はそれだけでは越えられない。苦難に直面した時、「だけど、私は負けない！」と立ち返る原点があるかどうか。

79 苦勞なしで手に入れることのできるものなど何もない。まして、忍耐なしには、何事も成就しない。ゆえに、断じて、へこたれるな！

80 勝利者とは、自分に挑み、打ち勝つ「勇氣」をもった人である。自身の弱さや臆病、逃避、あきらめの心、それらを制してこそ、あらゆる勝利の扉が開かれるからだ。

81 青年時代に勇氣をもって自らを鍛え、精進を重ねてきた人は、人生を勝利する確固不動の基盤をつくることができる。

82 人は皆、だれかの期待を背負っている。だれかに励ましを受け、だれかの祈りに背中を押されて生きている。そのことを感じた時、人は無限の力を發揮する。

83 人の可能性も、人の真心に触れてこそ開花する。一人一人の心に幸福の種を植え、勝利の花を満開に咲かせる自分になりたい。

84 21世紀に求められる人材の要件とは何か。それは磨き抜かれた「英知」とともに、苦境のなかで培われた「勇氣」と「人間性」を備えているということである。

85 人生の勝利というものは、決して学歴や知識量で決定するものではない。いかなる困難にあつても、自分のいだいた目標を貫徹するという強い意志力と忍耐力こそ、勝利の母であり、革命児として最も重要な資質であると考えられている。

86 理屈では、人は奮い立たない。人の心を揺さぶり、魂を目覚めさせるものは、懸命な魂の訴えであり、行動である。

87 戦争は「生命」を奪い、「人間」を不幸に陥れ、「社会」を破壊する極悪の魔性である。それに対し、教育こそ「生命」を輝かせ、「人間」を幸福へ高めて、よりよき「社会」を建設しゆく究極の正義である。

88 「勝利者の第一条件は、勇氣である」。「勇氣ある実践にこそ、生き甲斐がある」。幸せのためにも勇氣がなくてはならない。

89 勇氣は号令されて出せるものではない。人の真心を受け取った心の温かみの中から、わき上がるものである。

90 「だれか」ではない。「自分」がやる！率先の人生にこそ、喜びと勝利は輝く。夢に向かって一歩、また一歩、忍耐強く進もう。「負けじ魂」の人が最後は必ず勝つ。

91 苦闘の渦中は、ただ必死なだけかもしれない。しかし、その時が最も成長し、前進し、自身を磨き上げている時なのだ。苦闘即栄光であり、苦闘即勝利となるのだ。

92 対話こそ人間の特権である。それは人間を隔てるあらゆる障壁を越え、心を結び、世界を結ぶ最強の絆となる。

93 対話で築いた勝利は不滅である。反対に戦争で戦い取った勝利は、いかに大きな戦果であれ、やがて消え去り崩れ去る運命にある。

94 人間が人間を蔑み軽んじる差別や偏見が、どれほど人の心を傷つけ気持ちを踏みにじるものか、その苦しみ、辛さは、差別された方にしかわからない。

95 人間らしく生きる権利が保障され、誰もが等しく人生を謳歌できること——それは、人類の歴史を貫いてきた、万人の悲願である。そのために政治も経済もあるはずだ。

96 戦争というものは、人間の狂気を狂気と感じさせない、異常な精神状態に追い込むことを忘れてはならない。

97 いかなる戦争肯定論も断じて放棄すべきである。戦争は絶対悪であり、人間生命の尊厳への挑戦である。

98 平和とは、単に、戦争や紛争がない状態をいうのではない。人権が尊重され、民主主義の精神が国民に根付き、その社会に生きゆく人々が自由を享受し、安心できる生活を営んでいるかどうか、そこに平和の内実がある。

99 平和ほど、尊いものはない。

平和ほど、幸福なものはない。

平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない。

100 どんなに高度な知識をもって、それを人間の幸福のために生かす知恵がなければ、知識は役に立たないばかりか、むしろ危険でさえある。

現代文明の欠陥は、知識と知恵を混同し、知識が増えれば人間は幸福になると考えや  
すいことである。知識を正しく統御し、生かしていくのは知恵の働きである。

# 将軍学

その 15

1 通常、組織が成長するための条件は、指導者が常に人々に励ましを与え、気を配り、慈愛深く接し、人々と共に歩むことです。そして、それを休みなく続けることです。

2 私たちは、「励まし」というタダであつて最も価値ある「万の力」をいよいよ発揮し、明るく朗らかに前進していきたい。

3 芸術においても、人生においても「心こそ大切なれ」であります。その「心」をいかに強く、いかに賢く、いかに正しく、いかに深く磨き上げ、鍛え抜いていくか、ここに重大な人間教育の要諦があると、いつでも決して過言ではないであります。

4 人間には、立ち上がるべき時がある。戦わねばならぬ決定的な時が必ずある。その「時」を逃さず、時に適<sup>かな</sup>う行動を、起こすことだ。そして必ず勝つことだ。

5 最も苦勞した人こそ、最も成長を遂げる。過酷な「宿命」を背負った人こそ、最高の「使

命」を担っている人である。

6 人間は、孤独に陥り、自分ばかりが大変だと思うと悲観的になり、心も弱くなってしまふものだ。しかし、自分よりもっと大変ななかで頑張っている人もいる。それを知れば勇気がわく。そして、悶々と悩む自分を見下しながら、むしろ試練と戦う友を励ませる自分に成長できる。

7 最も厳しい状況にある人が決然と立ち上がり、勇躍勝利の劇を演じるならば、万人に勇気と、希望と、確信を与える。苦境のなかで戦っていることは、その重大な使命を担っているということなのだ。

8 逆境で戦えば、短日月でも力は磨かれる。向上心強き人には、逆境こそが最高の恵みとなるのだ。人間の生きる姿のなかにこそ、思想、哲学の実像がある。

9 時間があれば、環境条件が整っていれば、力が発揮できるといふものではない。大事なことは、使命の自覚である。希望は逆境をはね返す前進の活力となる。

10 盤石な組織をつくり上げるには、同志一人ひとりが、一騎当千の闘士となり、新たな開拓と拡大を、敢行する以外にない。

11 戦いとは、人間を見つけ育てることだ。人を触発することだ。その生命を燃え上げながら  
せることだ。

12 リーダーは、人に頼み、人にやらせようなどと、絶対に考えてはならない。すべて自ら率先し、自らが動くことによつて、波動を起こしていくのだ。

13 友情に勝る人生の宝はない。今日も勇気凛々と、対話の最前線へ新しい扉を開こう。  
真の友情とは、友の幸せを願う心である。

14 いかなる逆境にも、決して退くな。今こそ、「まことの時」だと自覚をし、誠実な心で  
立ち上がり、勝利をつかめ。

15 大変な時ほど笑顔を忘れずに。明るい笑いの中から勝利の力が生まれる。心に太陽を  
抱け。

16 「未来」とは自分で開くものだ。「よしやろう!」と決めて立て。新鮮な息吹で進め。

17 自分自身を日々変革しよう。「一步前進」の若々しい気概で最前線へ。

18 人生の目的は、幸せになることです。「忍耐があれば、人間は最後まで勇気をなくさない。そして、志を諦めることはない」

19 「教育という魂なくしては、全てが沈滞し、全てが滅びる。全てが墮落する」

20 人間と社会を変える根本の力は何か。それは「対話」である。人間は語ることによって、自分を完成させるのだ。しゃべるのです。向上のために、平和のために、友のために、自分自身のために。

21 最も苦しい時が、勝ち戦への道です。勝利の門を開くチャンスです。決して卑屈になつてはいけない。

22 挑戦の人生に行き詰まりなし。わが目標に向かって、具体的に勇敢に挑みゆけ。自分

に勝つことが最高の勝利だ。迷ったときこそ一歩踏み出せ。強気で壁を破れ。

23 自分を一番困らせる人間こそが、自分を成長させてくれる。人を変えるのではなく、自分が変わることだ。その決意に立った時に一切をプラスの方向に転じていけるのだ。

24 感謝を忘れず、報恩に徹すれば、自ら為すべき行動は定まる。必ず無限の勇氣と、智慧が滾々と沸き起こってくるのだ。感謝の人は光る。報恩の世界は栄える。

25 一見、平凡に見えることを持続していくと、やがて非凡に通じていく。地道な努力を積み重ねた人が、人生の勝利者となる。一日一日、新しい自分を創造しゆく日々でありたい。

26 努力を重ねてきたのだから、もうこれでいいではないか、との思いが進歩、向上を止めてしまう。その心を打ち破り、断じて、最高のものを作ろうとする真剣勝負の一念から、新しい知恵が、力が、創造が、生まれるのだ。

27 苦勞した分だけ、人の悩みがわかる自分になれるのだ。「忍耐」即「勝利」と使命に燃

えよ。

28 「いつか」ではない、「今」だ。「だれか」ではない、「自分」だ。先駆の使命に燃えよ。

29 「勇気」と「臆病」の差は微妙である。紙一重の差といってもよい。たった一言の励ましによつて、氣力が倍化し勇気が漲ることはじつに多い。

30 励ましのあるところは、勇気が満ちあふれる。その勇気を一切の中心にして堅い団結をつくり、強気で前へさらに前へと歩みを進めていくのだ。

31 誠意と真心は、生涯にわたつて崩れざる友情の絆を生み、結果として、自身にとって最良の味方を育てていくものだ。

32 「大誠実」を尽くす。「大誠実」を尽くして大変な所へ飛び込んでいく。どんな困難な環境や、人間関係の悩みも、「大誠実」によつて必ず打開することができる。

33 「私から始める、今から始める」新しい社会を築くために誰かではない。自分が行動す

る。いつかではない、「今」である。

34 リーダーの「三つの要件」第一に、「新しいものを創造しゆく能力」第二に、「グローバル（地球的）な視野」第三は、「社会的責任」創造力と国際性、そして社会貢献、ここにこそ新時代のリーダーシップがある。

35 智慧は現場にあり。リーダーは、真剣に一人一人の声を聴け、そこから「納得」と「勢い」が生まれる。「君も勝て」「我も勝つ」スクラム固く進もう。わが目標達成へ。

36 努力には二つある。一つは「直接の努力」、もう一つは「間接の努力」で、それは「準備の努力」だという。

37 努力が結果を伴わない場合は、努力の方向が悪いのか、準備を怠っているか、どちらかである。

38 直接の努力だけでは、空回りになることもある。結果が伴わないと「こんなに頑張っているのに…」と自分の努力を否定する気持ちに陥ることもある。

39 「戦い」を開始するからには、それだけの準備を。決意と闘魂をもって断じて勝つのだ。「準備の努力」が「決意と闘魂」が、かみ合ったとき、人は何倍もの力を発揮することができる。

40 困難のない人生などない。況や、使命が大きいほど、困難も大きい。その困難の連続のなかで、それでも辛抱強く、忍耐強く、一步また、一步前進し抜いていくかどうか、ここに大きな分岐点がある。

41 どんな試練に直面しても、絶対に窮しない、あきらめない。いな、試練があるほど、それを上回る智慧をたくましく発揮しながら、断固として乗り切っていく、「忍耐」と「智慧」にこそ偉大な指導者としての勝利の翼がある。

42 人は一人では生きられない。一人で気ままに生きたいと思っても、実は必ず誰かの世話になるし、孤立して生きても楽しいはずがない。

43 生きるとは、他者とつながる、交流することだ。人と出会い、対話し、心を通わせる。活動に充実感を覚える。それが、人間であり、生きるということだろう。

44 「遠大な理想をいだし、目的観を明確にしながら、身近な足元から実践するのが正視眼的生活である。」

45 先駆とは勇氣だ。先駆とは前進だ。先駆とは勇んで壁に挑む行動だ。この世に生きる事は、時につらすぎる事があるだろう。だが、それに勝ち抜いて生きる者、それは勝利者である。

46 動けば、何かが変わる。直接会えば、心が近づく。誠実に語れば、一歩強い絆が生まれる。

47 気取らず、気負わず、誠心誠意の対話で、友の心を開拓していけばよいのだ。人間は人間以上に偉くなれない。特別な人間などどこにもいない。

48 リーダー率先こそ団結の要である。師子奮迅の行動は必ず相手の心に響く。一日一日、一瞬一瞬に勝負がある。「今」を勝つことが一切の勝利の出発点である。

49 「閉ざされた自分」から「開かれた自分」への転換の第一歩が、対話への挑戦なのである。そのためには、わがままや自分勝手な生き方を排し、日々、自分を高めゆく努力

がなくてはならない。

50 友情は一生の「宝」だ。麗しき交友を重ねながら、自身を磨き抜いた生涯こそ、最上の人生であろう。

51 人生では辛く苦しく思われることが、幸福へつづく道であることがよくあるものです。「多くのものが絶えざる苦闘によつてのみ、かち得ることができる。」

52 毎日、毎日が、「新しき挑戦」である。毎日、毎日が、「新しき開拓」である。それが「今を生き抜く」真実の姿であるからだ。

53 「若さの秘訣」について「つねに新しいことを学ぶこと」「学ぶ人生」は老いない。

54 傲慢な人間は滅びる。孤立した人間は倒れる。良き友との連帯が、いかに大切であるか。力は結合から生まれる。創造には、人との切磋琢磨が不可欠だ。

55 一切は「これから」だ。決然として一人立て。一進一退に見えても断じて怯むな。勇

んで眼前の壁に挑め、必ず壁は破れる。

56 「立派な人が、また立派な人たちをつくる」「立派な人が栄える、これこそ公共の利益である」

57 「人間として真の偉大さにいたる道は、ひとつしかない。何度もひどい目にあうという試練の道だ」苦しみ抜いてこそ、本物が育つ。ゆえに、思うようにいかない時も、くさってはならない。上手くいかない時も、自分らしくベストを尽くしていけば、必ず、そこから道が開かれる。

58 ストレス学説の創始者ハンス・セリエ博士の勧め

第一に、自分で決めた人生の目標を持つこと。

第二に、他者にとって必要な存在になることが、自分のプラスになるという生き方をすることである。

59 人間の目は「前」についている。目標に向かって、前へ進みゆく存在なのである。とともに、苦しむ人びとに手を差しのべることによって、自分自身が悩みに決然と打ち

勝つ力を増すことができるのだ。

60 歴史は人を動かす。しかし、その歴史を動かし変えていくのも、人間なのである。この未来を創りゆく人間自身の力を引き出し、結び合わせていくことこそ、今日、人類が直面している喫緊きつぎんの課題ではあるまいか。

61 肉体的な鍛錬が身体能力の向上をもたらし、知的な鍛錬が頭脳を磨き上げる。それと同じように、私たちの心も鍛え、強化することができる。

62 他者とともに、他者のために、勇気をもって、一歩、行動に打って出ることによって、ストレスの大きい出来事さえも、より大きな生命力を得る機会と転じることができる。

63 これからの時代、ストレスの原因が増えることはあっても、減ることはないであろう。だからこそ、それをしのぐ強さと賢さと、そして朗らかさをもって、ともに支え合うネットワークを堅固に広げていきたいものである。

64 老いを「死に至る衰えの時期」と受け止めるか、それとも、「人生の完成への総仕上げ

の時」ととらえるか。老いを「下り坂」と見るか、それとも、「上り坂」と見るか。その微妙な一念の違いによって、人生の豊かさには、天地雲泥の違いが生じよう。

65 かりに無量の富や権力を手にしても、死という定めからは絶対に逃れることはできない。人は、限られた生を自覚するからこそ「より良き人生」「より価値ある人生」を真摯に求めることができるというてよい。

66 「われは、かく戦った。かく生き抜いた」「わが生涯に悔いはなし」と胸を張れる誇りがこそ、勝利の人生の証しといえないだろうか。

67 最後に「いい人生だった」と言い切れるゴールを、互いに励まし合いながら目指していく——そこに高齢社会の一つの指標を見い出したい。

68 「快楽の追求」と「幸福」とは違う。快楽のみを追求する生き方から、自身をより高い次元の目標へと向上させていかないかぎり、本当の幸福をつかむことはできない。それは、より多くを所有することよりも、わが心の世界を、より豊かに、より大きくしていく道である。

「幸福」とは「充実」である。人間は自身のみならず、他の人びとの幸福をも追求しゆくときに、いつそう深き充実をつかめるものだ。この「自他共の幸福」を目指す生き方こそ、「人間と人間」そして「人間と自然」の共生を実現する道ではないだろうか。